

西ノ野遺跡発掘調査報告書



平成6年6月

鈴鹿市教育委員会

例 言

1. 本書は鈴鹿市国府町字西ノ野 14-66 に所在する西ノ野遺跡の個人住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。調査面積は約 100 m²であった。
2. 現地調査および整理作業は、鈴鹿市教育委員会文化課（現文化財保護課）が行った。
3. 調査期間は平成 4 年 8 月 19 日から 8 月 21 日の 3 日間である。
4. 調査は藤原秀樹が担当し、浅尾悟と新田剛がこれを補佐した。
5. 本書は藤原が執筆、編集した。
6. 現地調査及び整理作業に参加した者は以下のとおりである。
（現地調査）下津菜々子、廣田裕、堀正治
（遺物整理）浅野和歌子、石谷誉代子、加城陽子、杉本恭子

本 文 目 次

1. 遺跡の立地と歴史的環境	1
2. 調査にいたる経緯と経過	3
3. 調査の成果	3
4. まとめ	7

挿 図 目 次

第 1 図 周囲の地形と遺跡	2
第 2 図 調査区位置図	3
第 3 図 遺構配置図	4
第 4 図 土壌 1 実測図	5
第 5 図 土壌 1 出土須恵器	5
第 6 図 土壌 2 実測図	5
第 7 図 土壌 4 実測図	6
第 8 図 土壌 4 出土埴輪	6

図 版 目 次

写真図版 1
1 トレンチ / 2 トレンチ
遺構検出状況 / 調査区全景
16 号墳周溝 / 16 号墳周溝 (3 トレンチ)
写真図版 2
土壌 1 / 土壌 2
土壌 4 / 土壌 4 埴輪出土状況
土壌 1 出土須恵器 / 土壌 4 出土埴輪

1. 遺跡の立地と歴史的環境

西ノ野遺跡は、三重県鈴鹿市の西部、国府地区の中位段丘（国府台地）の西端に位置する。南には愛宕山をはじめとする標高 70～90m 前後の丘陵地が広がり、西には鈴鹿川が流れる。国府台地は第三紀層からなる鈴鹿西南部丘陵地の裾に古鈴鹿川によって形成された扇状地であり、下層は礫岩からなり、地表近くは褐色・黄褐色の風化土層である。西ノ野遺跡周辺ではさらに黒ボクと呼ばれる黒色腐植土壌が表面を覆っている。標高は 40m 前後で、鈴鹿川の谷底平野とは 10m 前後の段丘崖を形成している。

この一帯にみられる人類の足跡は、西ノ野遺跡で採集される石器類で、搔器や彫刻刀形石器など旧石器時代に遡るものがみられる。また、北一色遺跡は縄文中期から晩期にかけての集落遺跡で、1968 年の調査によって竪穴住居跡 6 棟、合口甕棺墓 4 基、土坑、溝が検出された。西ノ野遺跡においても石鏃・磨製石斧等が採集されている。弥生時代においては、国府 A 遺跡、八野遺跡において弥生土器の散布が確認され、北一色遺跡調査に伴い竪穴住居 1 棟が検出されている。

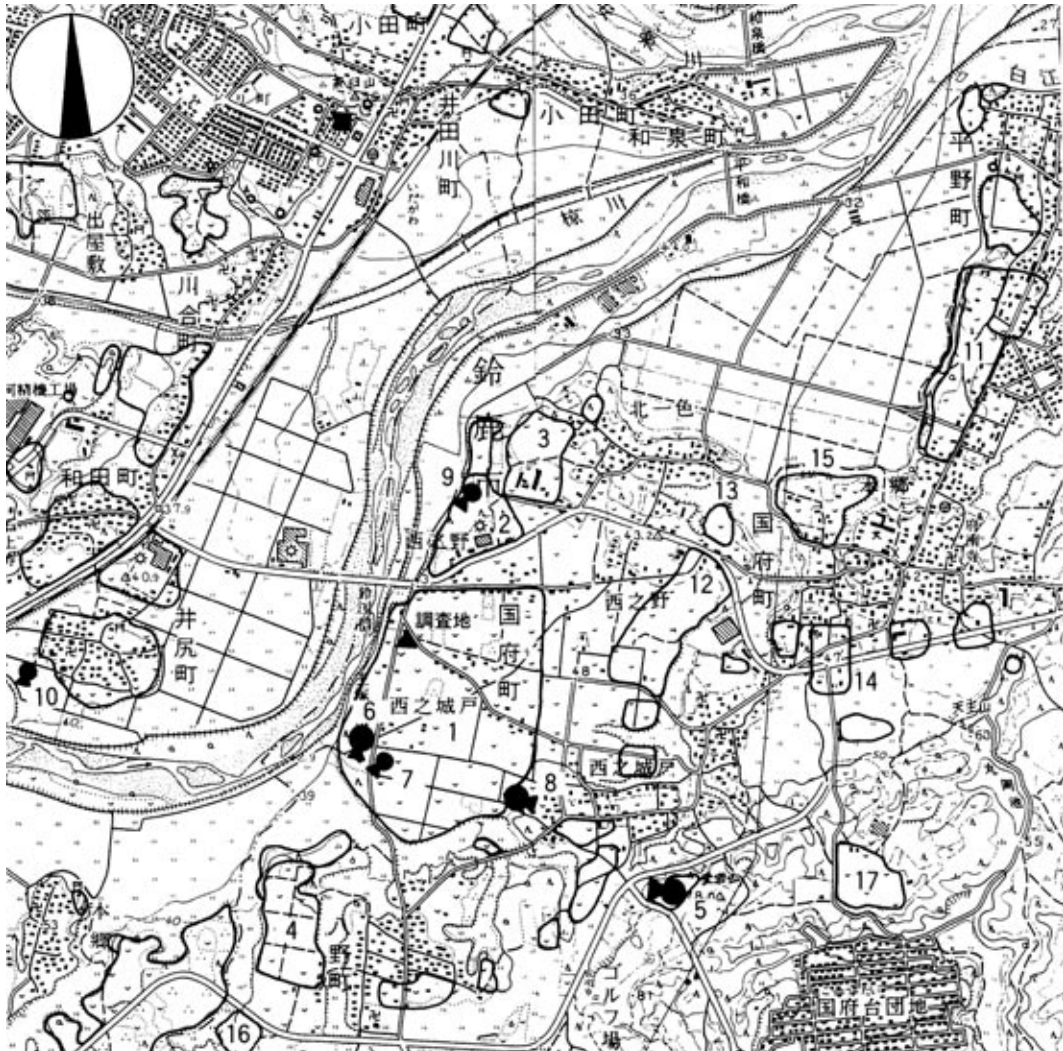
古墳時代になると、この一帯は伊勢湾西岸北半における中心地の様相をしめす。畿内から鈴鹿・布引山地を越えて伊勢湾岸への出口となる地理的な条件により、畿内王権の東国経営上極めて重要視されていたことは、ヤマトタケル終焉の地という記紀にみられる伝承からうかがえる。それゆえ鈴鹿川の流れを望む丘陵上に愛宕山 1 号墳（前方後円墳 70m）が 4 世紀末から 5 世紀初頭に出現し、5 世紀後葉には西ノ野 5 号墳（前方後円墳 30・5m）、さらに 6 世紀前葉～中葉にかけて西ノ野 1 号墳（前方後円墳 63m）・西ノ野 11 号墳（前方後円墳 50m）・保子里 1 号墳（双円墳 or 前方後円墳 50m）、対岸には 6 世紀前葉の井尻古墳（前方後円墳 47m）と北伊勢地方で最大規模の首長墓が集中的に築かれた。

西ノ野古墳群は明治期の村絵図によれば 91 基の古墳が分布する大古墳群であったが、開墾等により破壊され現存するものは前方後円墳 3 基を含めわずかに 12 基にとどまっている。唯一、群の北端に位置する 4 号墳が昭和 35 年に発掘調査され、報告によれば直径 10m の円墳で、主体は木棺直葬（礫床？）で 5 世紀後葉に築造され、6 世紀前半に追葬を受けている。同古墳のような後期群集墳に先行して形成される木棺直葬主体の円墳が西ノ野古墳群の主体を占めるようである。

歴史時代においては、当地に「国府」地名が残ることから古くより伊勢国府推定地とされてきた。三宅神社遺跡、国府 A・B 遺跡などの奈良・平安時代遺物散布地も多い。藤岡謙二郎氏による方八丁の国府域推定案が提示されており、昭和 32 年同氏らによる調査が行われたが関連遺構の確認にはいたらなかった。ところが平成 5 年、鈴鹿川対岸の広瀬町長者屋敷遺跡において奈良時代後葉～平安時代前葉にかけての国府政庁が確認され、当地の「国府」地名は平安後期の律令体制衰退後に国府が移転したことによるものである可能性が高まった。

また、八野窯跡群において生産された瓦には国分寺跡・長者屋敷遺跡（伊勢国府跡）と同範のものがみられる。八野遺跡内においても瓦の散布が見られ「釈迦堂」の地名も残るが、寺院遺構の確認にはいたっていない。

藤岡氏によって国府政庁の中心とされた地点は「長の城」とよばれ、台地の先端部を3本の堀で区画され、土塁をめぐる。関家の一族「国府氏」の居城であったとされる。また、南方の丘陵上の字観音山には補陀落山府南寺が存在し、近接する字日焼において中世墓が発見されたと記録されている。



第1図 周囲の地形と遺跡（縮尺 1/25,000）

1. 西ノ野遺跡・古墳群
2. 保子里遺跡・古墳群
3. 北一色遺跡
4. 八野遺跡・古墳群
5. 愛宕山1号墳
6. 西ノ野1(王塚)号墳
7. 西ノ野5号墳
8. 西ノ野11(椀塚)号墳
9. 保子里1号墳
10. 井尻古墳
11. 八百姫古墳群
12. 国府A遺跡
13. 国府B遺跡
14. 三宅神社遺跡
15. 国府城跡
16. 八野窯跡
17. 府南寺遺跡

2. 調査にいたる

経緯と経過

平成4年7月、安達一美氏から都市計画法第32条の協議が鈴鹿市都市計画部管理課へ提出された。同課から回覧を受けた鈴鹿市教育委員会文化課では、該当地が周知の遺跡「西ノ野遺」の範囲内であり、道路を挟んだ西側の土地で先に行われた緊急調査において古墳周溝が密集して検出されたことから、発掘届の提出および試掘調査の実施を申し入れ同氏の承諾を得た。

試掘調査は8月19日に実施され、小型重機を用いて対象地内に3本のトレンチを入れたところ土壌墓等が検出

されたため、急遽協議を行って建物基礎部分ほぼ全面にあたる範囲に調査区を拡張することとし、8月21日までの3日間をもって完了した。



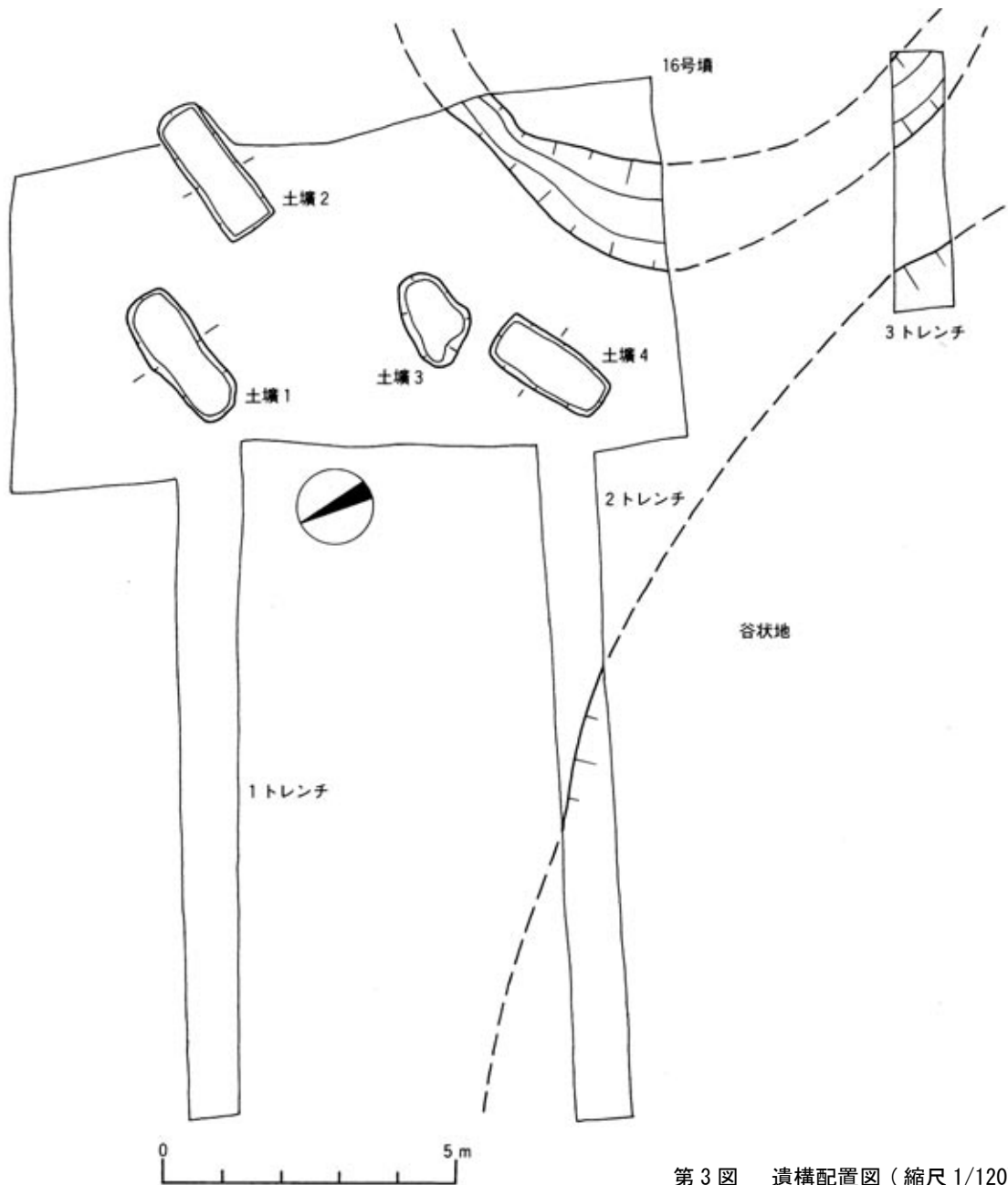
第2図 調査区位置図（縮尺 1/2,500）

3. 調査の成果

調査地点は鈴鹿川岸から約60m離れた、段丘崖（西方）に向けて極めて緩やかに傾斜する台地上で、畑として利用されていた。標高は約44mである。

調査対象地は一辺約20mの方形の土地で、試掘調査では幅1mのトレンチを6m間隔で設定して（北からNo.1～3）掘削した。その結果、No.1トレンチでは耕作土の直下に安定した地山（黄褐色の粗砂を多く含む風化土壌）が広がっており、東半部で須恵器を含む土壌を検出した。No.2トレンチでは同じく東半部で埴輪片を含む土壌を検出したものの、西半部は地山面が西に向かって落ち込んでいるのが確認された。No.3トレンチはこの地山の落ち込みの広がりを確認するため設定したが、溝状の遺構を東端で検出したものの、すぐ西には地山落ち込みが確認できたため短くおさまった。

結果として、調査区は北西から南東方向に向かって入り込む埋没谷の縁辺に位置する土壌群であることが確認された。遺構検出面が浅く、また土壌が検出される部分が建物基礎と重複するため、No.1・2トレンチを繋ぐ形で建物建築範囲の本調査とした。



第3図 遺構配置図 (縮尺 1/120)

西ノ野 16号墳

調査区の南端で延長 4.2m にわたり周溝を検出した。一部が No.3 トレンチ東端にもかかっており、これらから推定復元すると径 9m の円墳であると考えられる。

周溝の最大幅は調査区南壁で幅 1.9m、検出面からの深さ 30 cm を、調査区東壁では幅 0.8m、深さ 16cm、No.3 トレンチでは幅 1.2m、深さ 35.5cm を測る。周溝底面は東に向かって高くなり、本来地形の傾斜に併せて築かれたものが耕作により水平に削平されたことをうかがわせる。埋土は黒褐色土の単純な堆積である。周溝内および周辺からの遺物の出土は見られなかった。

土壙 1

長楕円形に近い隅丸長方形の土壙で、長さ 2.45m、幅 1.0m、検出面からの深さは中央で 13.5cm と浅い。側壁はやや内傾する。主軸は N-79.5° -E である。耕作により著しく削平されており、検出面でただちに須恵器坏 3 点が出土している。埋土は黄白色粘質土 (耕作攪乱土)、黒色土、黒褐色土となる。底面は平坦で特に遺物等の出土は見られない。

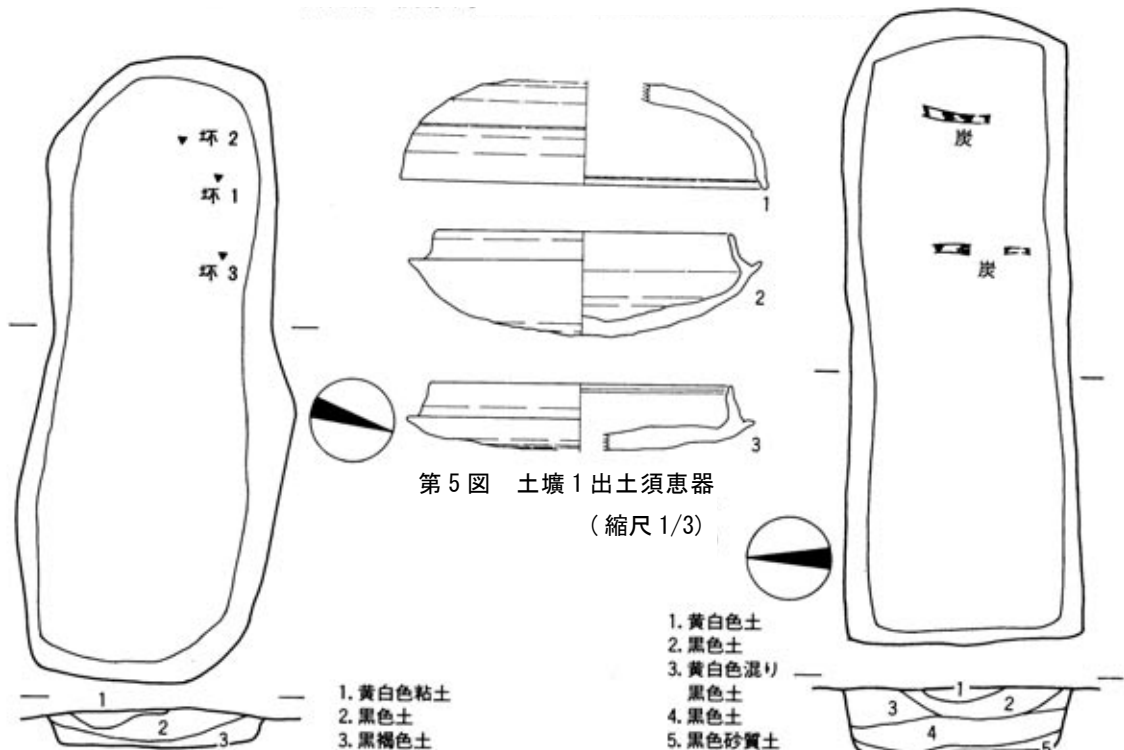
須恵器坏 (1) 約 4 分の 1 が残る坏蓋である。復元口径 14.6 cm、器高 4.1 cm と深く。天井部は丸く膨らみを持つ。天井部と口縁部の境の稜は極めて低い。口縁部は内湾し、端部は内傾する段をなすが、シャープさを欠き痕跡的である。天井部 3 分の 2 について回転ヘラケズリ調整が施される。

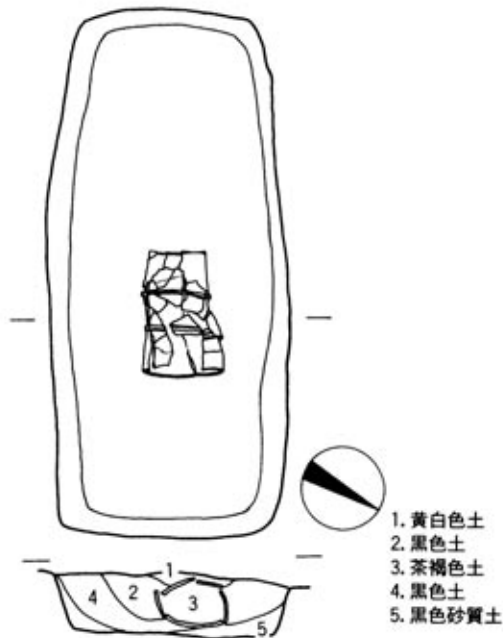
須恵器坏 (2) 2 片に割れて出土したがほぼ完形の坏身である。口径 11.7 cm、蓋受部径 13.9 cm、器高 4.2cm を測る。たちあがりは薄く比較的長く内傾して、短部は段をなさず丸くおさめられる。外底部はヘラ切り不調整であるが、他は丁寧に回転ナデ調整される。

須恵器坏 (3) 遺構検出時に土壙上面から出土。約 8 分の 1 を残す坏身で、焼け歪みにより、扁平に変形している。復元口径 12 cm、蓋受け部径 13.8cm、器高 2.6 cm を測る。たちあがりはやや内傾するものの厚く直線的で、口縁端内側の段は退化して凹線を施したようになっている。底面は焼け歪みのためほとんど膨らみを持たず、外面中央はヘラ切り不調整、周囲に 2 回転分ヘラケズリ調整を施す。

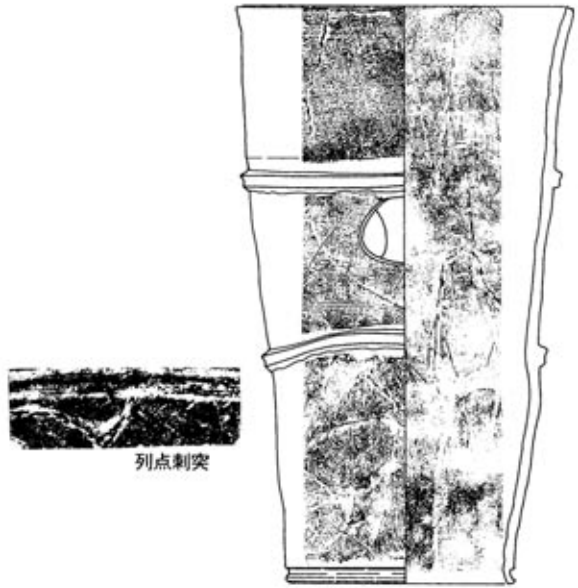
土壙 2

シャープな角を持つ均整な長方形の土壙で、長さ 2.5m、幅 85 cm、中央部深さ 25.5cm を測り、側壁はほぼ垂直に掘り込まれる。主軸は N-81° -E と土壙 1 とほぼ並行する。埋土は黄白色粘質土 (耕作攪乱土)、黒色土、黄白色土混り黒色土、黒色土である。底面はほぼ平坦で、東よりに主軸と直行し 50cm の間隔をおいて平行に並ぶ炭化材の痕跡が見られた。出土遺物は全く見られない。





第7図 土壌4実測図（縮尺1/30）



第8図 土壌4出土埴輪（縮尺1/6）

土壌3

不整な半円状の土壌で東西1.65m、南北1.1m、中央部深さ26.5cmを測る。埋土は上層が黄褐色砂質土、下層が黒色土で層位の逆転が見られ、床面も西に向かって落ち込む凹凸激しい不整形をしており、風倒木痕の可能性が高い。遺物の出土はない。

土壌4

わずかに隅丸で長辺が胴張る長方形をした土壌で、長さ2.08m、幅95cm、中央部深さ25.5cmを測る。側壁はやや内傾し、床面は平坦である。主軸はN-60°-Eと他2者とは異なる方位を示す。埋土は上層から黄白色粘質土（耕作攪乱土）、黒色土、黒色砂質土である。中央やや北寄りに、床面からは5cmほど浮き、口縁を北に、主軸を掘り方にそろえ水平に横たえられた状態で、円筒埴輪1個体が出土した。埴輪は土圧でつぶれてはいるが円筒形を保ち、内部には柔らかい暗褐色土が充填していた。

円筒埴輪は耕作により一部が削りとられていたがほぼ全形を復元できる。口径26.4cm、底径18.2cm、器高46.2cmを測る。焼成はあまく軟質で淡黄白色～赤褐色を呈し、黒斑はない。底部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁端も外反しない。粘土帯巻き上げの休止乾燥が1回下段タガ下部で行われており、そこでやや屈曲している。口縁端は外反せず底端部外面には一般に淡輪技法と呼ばれる底部形成の際型として用いられる植物質の輪の圧痕が明瞭に残る。タガは2段に施され、断面「M」字状をなすが、下側面のナデは軽く貼り付け時の押さえの跡が波状にみられる。透し穴はタガ間の上よりに横長の楕円形にあけられるが、かなり穿孔位置が偏向して中軸を通して相対はしない。外面はタテハケ調整された後、タガ間についてはC種ヨコハケが疎に施される。下段タガ下には、爪先による列点状の刺突が一重にめぐる。内面は底部についてはほとんど調整が無く粘土帯の接合痕を明瞭にとどめる。上部については横方向に丁寧なナデ消しを行った後、1～1.5cm等

間に縦方向の強い指ナデを施す。

4. まとめ

今回の調査で検出された遺構は小円墳と付随する土壌であり、後者は土壌墓と考えられる。同様の遺構は国府地区では保子里古墳群、北一色遺跡において確認されている。

土壌 1 は出土した須恵器が陶邑編年の TK-10 型式に相当し、6 世紀中葉に位置づけられる。土壌 4 の円筒埴輪の出土状況についてまず想定されるのは円筒埴輪棺である。国府地区において円筒埴輪棺墓は過去の調査で北一色遺跡、保子里 14 号墳裾、同 13 号墳主体部から検出され、当地域の墓制として定着していたと見られる。しかし当遺跡の場合 1 個体のみが用いられ、使用された円筒埴輪の大きさに対して掘り方がアンバランスに大きく、底面から浮いた状態で出土している。さらに通常見られる口縁・底部・透し穴への埴輪片や粘土による閉塞が行われず埴輪棺と判断することはためらわれる。出土状態から、遺骸の胸に抱かせるように副葬したと考えることもできるが、そのような例は聞かず判断に苦しむ。埴輪生産あるいは葬送祭祀に従事する特別な人物が葬られたのであろうか。

使用された円筒埴輪は、いわゆる淡輪系のもので鈴鹿市域ではもっとも普遍的に見られるものである。同系の円筒埴輪についてはすでに多くの集成や編年案の提示が行われている。2 次調整に C 種ヨコハケ調整が用いられるものの、タガ間にのみ疎に施されるものは同系の埴輪としてやや新しい様相であり、おおよそ 6 世紀前半代に位置付けておきたい。当遺跡のものを含めて埴輪棺に用いられるものは粘土帯巻き上げ形成ならびに外面調整が丁寧で、埴輪本来の赤色軟質を保つという傾向が見受けられ、供給数が多い前方後円墳に樹立されたものが小型化・手順の簡略化が著しく、かつ須恵質焼成の割合が高いことと対照的で、使用目的に応じた柔軟な生産対応がとられたことが伺われる。埴輪棺など 1～5 個体ほどの需要に対しどのような生産・供給体制がとられたのか興味深いところである。

16 号墳については遺物の出土がみられない。しかし各土壌墓は 16 号墳と主軸が直交するように配置されたとみられ、同古墳を主墳と意識して形成されたと考えれば、6 世紀初頭の築造とみておきたい。

西ノ野古墳群は、北伊勢地方における最大の古墳群であるものの、今日まで考古学的な調査や保護措置は十分でなく、伊勢の古墳文化を考える上での資料的空白はまことに大きいといわざるをえない。今回の調査では、個人住宅にかかる小規模なものではあるが、大規模古墳群内の墓制の階層構造の一端を知る良好な資料を得ることができた。ようやく個人住宅開発への対応を始めたばかりの当市にとっての一つの成果としてここに報告するとともに、今後とも開発と文化財保護の円滑な調整を進めていきたい。

【参考文献】

- ・仲見秀雄外『鈴鹿市史』第一巻 1980 鈴鹿市教育委員会
- ・真田幸成「古墳発掘調査報告 保子里 13 号墳」『神戸史談』4 1964 神戸高校郷土史クラブ
- ・和田年弥「古墳文化の地域的構造とその特質—伊勢国鈴鹿地方の場合—」『古代学研究』72 1974
- ・坂靖・穂積裕昌「淡輪技法」の伝播とその問題」『木ノ本釜山(木ノ本Ⅲ遺跡)発掘調査報告書』1989 同志社大学考古学研究室(編)・和歌山市教育委員会
- ・鈴木敏則「伊勢の淡輪系円筒埴輪」『Mie history』Vol.4 1991 三重歴史文化研究会

写真図版 1



1 トレンチ (東から)



2 トレンチ (東から)



遺構検出状況 (北から)



調査区全景 (西から)



16号墳周溝



16号墳集溝 (3 トレンチ)



土壙 1



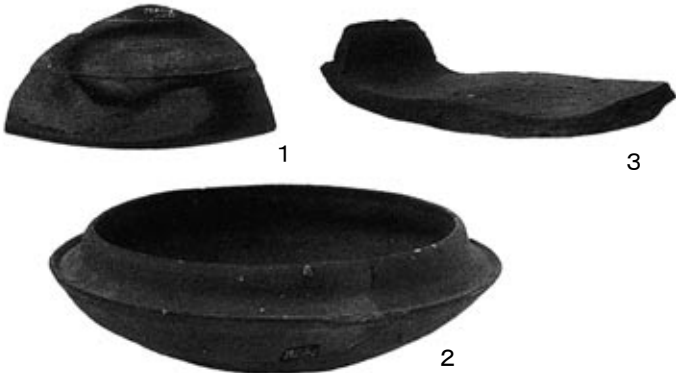
土壙 2



土壙 4



埴輪出土状況



土壙 1 出土須恵器



土壙 1 出土埴輪

報告書抄録

ふりがな 書名	にし野遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	鈴鹿市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	14							
編著者名	藤原 秀樹							
編集機関	鈴鹿市教育委員会							
所在地	〒513 三重県鈴鹿市神戸9丁目11-15 PTEL0593(82)9031							
発行年月日	平成6年6月14日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にし野遺跡	みえけんすずかし 三重県鈴鹿市 国府町字にし野	24207	510	34度 51分 4秒	136度 29分 43秒	19920819 ～ 19920821	100 m ²	個人住宅 建築
所収遺跡名	種 類	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
にし野遺跡	古墳	古墳	円墳1基 土壙墓3基	須恵器 円筒埴輪		6世紀前半の円墳と それに付随する土壙 墓。土壙墓の1基は 円筒埴輪を埋納。		

西ノ野遺跡発掘調査報告書

平成6年6月14日

発行：鈴鹿市教育委員会

鈴鹿市神戸9丁目11-15

TEL0593(82)9031

印刷：有限会社一誠堂印刷所

亀山市本町3丁目14-6

TEL05958(2)2331